演習問題 5.1(b)

ポテンシャル関数 $\Phi(f,r) = \operatorname{abs}(|f|-|r|)$ を用いて、各操作が O(1) 償却時間となることを示す。

操作一覧

```
class Deque q where
  empty :: q a
  isEmpty :: q a -> Bool
  cons :: q a -> a -> q a
  snoc :: q a -> a -> q a
  head :: q a -> a
  last :: q a -> a
  tail :: q a -> q a
  init :: q a -> q a
```

各証明

```
empty isEmpty snoc head last init は省略
```

cons

cons は実際のステップを1回行う。

ポテンシャル関数は、要素数 e について

- e=0 のとき、|f|=0, |r|=0 なので $\Phi(f,r)=0$
- e=1 のとき、|f|=1, |r|=0 なので $\Phi(f,r)=1$
- ullet e=x~(x>1) のとき、|f|=1, |r|=x-1 なので $\Phi(f,r)=x-2$

となる。このとき、要素追加に伴うポテンシャルの増分は高々1なので、償却コストは2である。

償却コストが要素数に関わらず定数で表せるため、cons はO(1) 償却時間の処理である。

tail

連続して tail を呼ぶ処理を考えると、 tail を呼ぶ回数に対して reverse を呼ぶ割合が最大となる場合は、 Qfr の f が 1要素で、 r が $|r|=2^k$ と表せる場合である。

- f が 2要素以上の場合、1要素の場合に比べて割合が小さくなる。
- $|r|=2^k$ と表せない場合、奇数回 f を連続して減らす処理が現れる。これは偶数回の場合に比べて割合が小さくなる。

そこで、 \mathbf{f} が 1要素で、 \mathbf{r} が $|\mathbf{r}| = \mathbf{2}^k$ と表せる場合を考える。(要はコストが最も大きくなるパターン)

- reverse を呼ばない場合
 - \circ 実際のステップを1回行い、f を減らすのでポテンシャルの増加は高々1、よって償却コストは2
- reverse を呼ぶ場合、長さをnとすると、

- o 実際のステップは
 - 要素を減らす1回
 - 長さを測定して n 回
 - リストを半分にして n/2 回
 - リストの半分を reverse して n/2 回
- o ポテンシャルは
 - n-1から 0 になるので n-1 減少
- o よって償却コストは1+n+n/2+n/2-(n-1)=n+2
- \circ 一方、f r の長さをデータ構造に保持し、O(1) で参照するようにすると、償却コストは 2 になる以上から、データ構造の工夫により、tail は O(1) 償却時間の処理となる。

参考

```
mapM_ (print . foldl cons (empty :: BatchedDeque Int)) [[1..x] | x <- [1..10]]
Q [1] []
Q [2] [1]
Q [3,2] [1]
Q [4,3,2] [1]
Q [5,4,3,2] [1]
Q [6,5,4,3,2] [1]
Q [7,6,5,4,3,2] [1]
Q [8,7,6,5,4,3,2] [1]
Q [9,8,7,6,5,4,3,2] [1]
Q [10,9,8,7,6,5,4,3,2] [1]</pre>
```

```
mapM_ print $ iterate tail $ Q [1] [10,9,8,7,6,5,4,3,2]
*** Exception: empty
CallStack (from HasCallStack):
    error, called at Ex1.hs:77:19 in main:PFDS.Sec5.Ex1
Q [1] [10,9,8,7,6,5,4,3,2]
Q [2,3,4,5,6] [10,9,8,7]
Q [3,4,5,6] [10,9,8,7]
Q [4,5,6] [10,9,8,7]
Q [5,6] [10,9,8,7]
Q [6] [10,9,8,7]
Q [7,8] [10,9]
Q [8] [10,9]
Q [9] [10]
Q [] [10]
```